老舗を訪ねて

障害者に「働く幸せ」目指す

関木工所（木製家具・建具製造販売）

須坂市　1882（明治15）年創業

専用の器具を使い、木の表面を丁寧に削っていく。須坂市八町にある工場で20日、職人たちがアルミとの複合サッシでフレームに使う木材の加工作業に取り組んでいた。5代目社長の関裕朗さん（50）は「一度表面を削ってつやを出す塗装をした後、もう一度表面を削って塗装する。厚く塗装することで、木を長持ちさせることができる」と話す。

木製の建具や取付家具、大工工事のほか、複合サッシの製造にも携わり、木に関連する幅広い事業を手掛ける。社員は19人。1882（明治15）年に裕朗さんの曽祖父、竹太郎さんが須坂市須坂に創業した。手作りの建具をリヤカーで行商したという。

その後、裕朗さんの祖父で、2代目の寿男さんが事業を拡大。家に出向いて家具を取り付けるサービスを始めたほか、1961（昭和36）年には須坂に家具を売る専門店も設けた。当時は高度経済成長期で子どもの数が増え、家具の需要も堅調。裕朗さんは、昭和40年代前半ごろまでは「店に家具を出せば売れる時代だった」と振り返る。

その後、市内に大型の家具専門店ができたこともあり、売り上げは少しずつ減少。だが大手ゼネコンから仕事を受け始め、経営が大きく傾くことはなかった。1970年に株式会社化した。

長野冬季五輪が開かれた98年、作業効率の向上などを目的に八町に工場を新設した。約10アールの広さで、大きな木材も取り扱えるようになった。翌年には北信地方の業者の要請に応じ、フレームに木材とアルミを使った複合サッシ製造の協力を始めた。

木材の表面の触り心地を職人と確認する関裕朗さん（右）

裕朗さんは「フレームに木材を付けることで、断熱の役割を果たすことができる。私たちの木のノウハウを生かすことができた」。製造に携わった複合サッシはこれまで、県内の中学校や飯山駅（飯山市）の駅舎、県外では熊本空港や国際基督教大（東京）などで使われている。

一方で、15年に社長に就いた裕朗さんは、障害者の雇用の場としても会社を育てたいと思い描く。

本社は須坂市須坂219の1。工場は同市八町1903の1。☎026・245・1096。午前8時～午後5時半。土日と祝日は休み。

須坂市八町にある関木工所の工場

次女（17）が1歳の時、事故で脳内出血を起こし、後遺症で知的障害になった。現在、県長野養護学校高等部の分教室「すざか分教室」（須坂市）に通う。てんかん症状を起こすこともあり、「学校以外の時は常に誰かが付きそうようにしている」という。次女の子育てを優先し、12年には須坂にあった専門店を閉じた。

そうした中、裕朗さんは障害者を多く雇っている会社についての本を読み、感銘を受けた。障害者が働き、社会に関わることで、幸せを感じてもらう取り組みだと紹介していた。自社の工場は刃物を扱う機械もあり、危険も伴う。だが、障害者に「働く幸せ」を提供する場にできれば、当事者もその親も、地域で安心して暮らしていけるのではないかと考えている。

3年ほど前に、障害のある子どもの就労体験を受け入れたことがある。今は障害者を雇用していないが、今後に向けて精神、知的、身体といった障害に応じた仕事の内容を検討している。裕朗さんは「ライフワークとして、少しずつでも環境を整えていきたい」と話す。